

茶の馳走なりといはれしが、我不幸にして未だ快よき茶の馳走に逢はず、茶を多く用ふるは佐久郡の一部分なりといふ、惣じて此邊は質素といふを通り越して衣食住とも見苦しき處多し。

三十日 雨

小諸附近には終日雨のふりくらすといふとなしときししが、今日は夜に入るまでやまず。

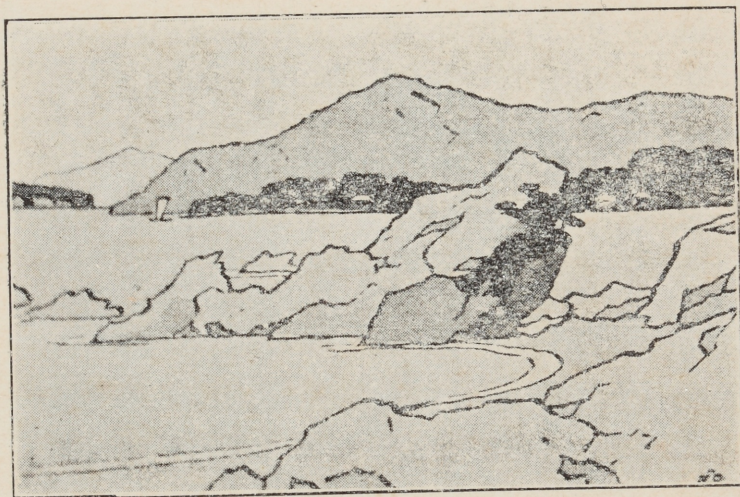
主翁は退屈ならんとてまだ青き柿の實いくつか持來る、漉くして食ふにたえず、筋とらぬ鞘豆、種ぬかぬ冬瓜、鹽引の鱒に一日をくらしぬ。(つゞく)

△ △ △

町盡頭から爪先上りの、草の被さる細路が蛇の様に山の背を蜿つて居る、上り次第に眼界展けて、行先に海面、左右に松山、振顧れば大津の町が手に取る如く見えて來る、沖から來るか、山合から湧出るのか址れく、の白い雲が松の梢に絡つては慌て、西へと飛んでゆく

雲の變化の多い土地だ、畫家の住居に適した

土地だ……フホンテヌブローの森の側で、大自然の生命に教を受けたミレーやルーソウ、あのような大家でも、バルビゾンの村景色の雲の變化に憧れたらう、自然に對する嘆美と哀感と



山 葉 下 藤 次 郎

は、風景畫に永久の生命を宿す力である、自然は親しまぬものにも惠を與へるけれど親しまずに受くる恩惠は、受くるに非ずして盜むのだ、就中美術家には此關係が深い、自然に親しまぬ者の風景畫は、如何に色調の巧を凝らしても遂に生命を宿す事が出來ぬ(掬亭氏五浦訪問記の一節)

△ △ △

故、島田蕃根翁曰く特に畫伯ぢやとか、文人ぢやとか、金錢に力瘤を張る様ぢやつたら、決して其の作品は後世に残らない。私は昔から經驗して居るんぢやが、生前は潤筆料を貪つて二十兩五十兩とつた人間はいざ其の人が物故するとなつたら、氣の毒な程値が下落する、これに反して今日まで、美術の極粹ぢやとか、日本の寶ぢやとか、千古不朽の妙作ぢやとか、相賞呼して、世に尊敬されて居る作品は、皆其の昔し、作者が金錢などは石塊と輕視し、好く赤貧に安所し、甚しきは落魄、米を買ふお金にも窮した程の人に限られた様ぢや。すべて世俗を超脱したものなど

は、其の生前は貧乏に苦しめられる、それが死後になると、其の人物の眞價が赫灼として光輝を發して來るから妙ぢや。(新公

論)